Koryo 陵雲 High school

〒031-0011　青森県八戸市田向二丁目2番6号／電話 0178-44-3866／FAX 0178-43-9077
http://kouryo-high-school.com／メール kouryo@chibagakuen.ac.jp

進路を考える

1月18日（月）、LHRの時間に進路指導の川村先生から1年生対象の進路講話が行われた。川村先生は、進路の参考にといくつかの本や言葉を紹介しながら働くことの意義、勉強することの価値について述べた。同学年は、新型コロナウイルスの影響で外部講師を招いての進路講話が中止になり、外部での進路相談会への参加も見合わせているため、進路について考える機会が例年に比べ少なかった。そこで2週に渡り、進路を意識する機会が設けられた。

《生徒感想》

1年　髙橋　繭莉（三沢第二中学校出身）

私は、ウェディング関係の仕事に就きたいと思っているのですが、どの仕事に就くかは関係なく、一人の人間として社会に通用する人になることを講話の中で教えて頂きました。進路に役に立つ本や言葉の紹介もあり、有意義な時間になりました。

1年　森崎　維月（第三中学校出身）

やはり勉強することは大事だと思いました。仕事をするということは収入を得るだけではなくて、生きがいや達成感などさまざまな機会があると知ることができました。今日の話を進路に生かしたいです。

1年　前村　愛梨（北稜中学校出身）

進路はある程度、自分の中では決めていたけれども実際どうしたらいいかも分からなかったし、迷っていたので参考になりました。仕事について辛いイメージを持ったまま働くのではなくて、いろいろな見方をして学校生活も仕事にも向き合っていけるように努力したいです。

1年　伊藤みんと（白山台中学校出身）

自分がやりたい目標を見つけることで、目標実現のためにどんなことをすればいいのか分かるし、それが勉強や苦手なことでも楽しいと思えることに繋がるのだと思いました。インプットよりアウトプットの方が大事だと知っていたけれど、この機会にやっていきたいと思いました。自分の将来のこと、それに対して何をすればいいのかじっくり考えてみたいです。

1月25日（月）は、3年生から1年生へ進路講話が行われた。司会は成田先生が務め、3年生3人に進路決定に至るまでの話を質問形式でしてもらった。就職の小保内晴彦君（3年・北稜中学校出身）は、希望の職種は別にあったことを挙げ、「好きなことを仕事にできればいいが、生涯にわたって仕事としてやっていくことと趣味の範囲にとどめること、それぞれの適性は違う」と語った。そして、親と意見が対立したときには、説得も必要だし、納得してもらうための自分の努力も忘れてはならないと結んだ。鈴木広美さん（3年・米沢市立第二中学校出身）は、大変だったこととして部活動と勉強の両立を挙げた。しかし、1年生の早い段階で進路を決めていたため、受験準備への取り掛かりが早かった点が良かったと述べた。その分、出願、受験結果が出るのも早かったので、自動車学校へ通ったり、アルバイトをしたりする時間が確保できたと教えてくれた。また、関桃香（3年・道仏中学校出身）さんは、頑張ったこととして学校へ来ること、そして日々の勉強の積み重ねを挙げた。出席状況を良好にしておくことは、推薦基準をクリアすることにも繋がる。勉強の積み重ねることは受験勉強のベースとなり、奨学金を借りる際にも役立つと話した。1年生からは、地元を離れる不安はないか、経済的なことを相談するには、などの質問が挙がった。3年生は、受験についての不安は誰でもある。だからこそ、悩まずに身近にいる親や先生方に相談し、後悔しないための進路選択をするよう助言した。終始3年生の実感のこもった言葉に真剣に耳を傾けていた1年生たちは、「自分で調べて自分で考えることの大切さ」「生活面や精神面での自立」「幅広い視野で進路を考えていくことの重要性」を学んだ。まだ先のことではなくて「今」が今後に繋がっていくとして計画的に準備を進めていかなくてはならないということを強く感じた様子だった。

2年進路講話

1月25日（月）、2年生のLHRは（株）マイナビの熊谷さんを招いて進路講話を行った。コロナ禍での講話ということで、安心して臨んでもらうため、事前にPCR検査を実施しての来校となった。今回は、「志望理由書対策講座」と題して書き方指導、書く意味についてお話して下さった。

《生徒感想》

2年　島守　春姫（三条中学校出身）

自分がいかに志望理由書を甘く見ていたかを思い知らされました。お話を聞く前は、小論文や試験、面接の方が重要だと思い込んでいました。しかし、志望理由書が受験者の第一印象を大きく左右することや志望理由書をもとに面接が行われることを聞き、考えを改めました。

2年　川畑　努斗（北稜中学校出身）

今回の講話で、話し言葉と書き言葉に気をつけながら志望理由書を書くということを学びました。私は就職希望ですが、志望理由は必ず必要になってきます。だから、今回聞いた志望理由書の書き方はもちろん、何事も自主的に行動するということを忘れないで進路活動に生かしていきたいです。

2年　佐々木琉惟（三戸中学校出身）

志望理由書を書くには、まず自分自身を知るということが大事だと分かりました。そこから、何になりたいか、将来像、志望動機、選択理由を具体的に書くと教わりました。今後も書く作業は多くあると思うので、自分の意志をしっかり伝えられるよう相手を意識して書こうと思います。

2年　若本　京良（第一中学校出身）

志望理由書を書くときは、一方的に自分が伝えたいことを書くのではなく、相手が知りたいことを書く方が良いと分かりました。また、自分のことを分析するだけではなく、進学先の研究もすることが大切だと分かりました。私は、その点が特に足りないので、すぐにでも調べていきたいです。

校長先生による講話

1月28日（木）、3年生に向けて校長先生による講話が行われた。最初に本校創設者の千葉クラ先生のこと、その後クラ先生の思いを継いだ千葉富江先生の生い立ちなどを説明し、「七転八起」の精神について語られた。また、自身が修学旅行の引率で自主研修の生徒たちと達磨寺を訪れたときのエピソードを交え、失敗を恐れないで何事にも挑戦してすることの大切さを述べた。最後に校長先生は、千葉富江先生からいただいたという達磨を手にして「これから辛いこともあるだろうが、諦めず頑張ること。人は、立って（頑張って努力して）いるから転ぶ。何もしていなければ転ぶこともない。もしも、転んだときには達磨のように諦めないで立ち上がること。若い皆は失敗してもいくらでも取り戻せる。だから何度でも挑戦してほしい」と激励した。

高校の教室に新聞を

各クラスに無料で新聞を提供してくれている東奥日報の「高校の教室に新聞を」のコーナーで、栗橋美妃さん（2年・第一中学校出身）が紹介される。2月3日（水）、2月10日（水）、2月17日（水）のいずれかの朝刊に掲載予定。

人間学Ⅰ

手食文化を学ぶ

1月21日（木）、人間学「現代を生きるⅠ」人間と文化の単元がスタートした。最初の授業は、世界の文化、主に食文化について学んだ。生徒たちは、箸食、ナイフ・フォーク・スプーン食、手食の世界の三大食作法の割合と世界の人口との関係を学んだり、実際に手食でカレーを食べる体験をした。子供のころを懐かしむかのように全く抵抗なく食べ始める生徒、最後まで手をつけられない生徒がいたが、最後は皆、美味しくカレーを食べました。体験後、生徒たちは口々に手食により感じた食材の触感、食べることの難しさを実感できたと話した。今回学んだのは食文化だったが、食に限らず他の文化を学びたいという意欲をかきたてられた授業となった。

《生徒感想》

2年　浄法寺七海（三沢第五中学校出身）

考えてもみませんでした。自分が手でカレーを食べることになるとは。世界にはたくさんの人がいて様々な文化があります。私たち日本人が箸で食べるのは普通のことですが、世界から見ると珍しいものではないかと思いました。けれど30パーセントもの人が箸を使っているのであれば、何も珍しいことではないのかもしれません。本来、手で物を食べることは不思議なことではありません。それでも、私は手で食べることに抵抗がありました。カレーはスプーンで食べるという固定観念がそうさせているのだろうと思いました。でも、手にカレーが付いてしまうと意外にも抵抗なく食べることができました。しかし、3本指で食べるのは難しかったです。本場の人は、どのように食べているのか疑問に思いましたし、調べてみようと思います。

2年　霞　瑠菜（第一中学校出身）

テキストの最初のページに「自国の文化のみにこだわって他の文化を無視していては、お互いを理解して生きていくことはできません」という文がありました。実際カレーを手で食べることになったとき、少し抵抗があり、自分が普段しないことをするのは大変だと思いました。また、食事の仕方のフォーク・ナイフ、箸、手の種類の中で、手で食べている人が一番多いことに驚きました。しかし、先生の説明や人口についての数字を聞き、納得しました。自分は日本に生まれたから、箸を使ったり、他の食べ方をしたりと今のような生活をしていますが、もし、違う国で生まれたら、手での食事が当たり前で、仏教ではなくイスラム教だったかもしれません。そう考えると、異文化を学ぶことは大切なことだと思いますし、尊重し合うことが大事だと思います。他の文化について自分でも調べて、学んでみたいと思いました。

2年　石和　葉大（東中学校出身）

カレーを手で食べましたが、カレーが熱く、日本のルーより水っぽかったり、使える指が3本に限られていたので、少量のカレーを食べるのでさえ時間がかかり苦労しました。スプーンなら感じることのないつかみにくさを実感しました。日本は、おにぎりやパン、お寿司などを手で食べていたので、異国の文化が意外にも身近なところにあるのだと気づかされました。今日は、食文化について勉強しましたが、世界にはまだまだ知らない文化があります。これから、グローバル社会で生きていくうえで、他国の様々な文化を理解し、受け入れていくことが大切だと思いました。

2年　吉田　光汰（根城中学校出身）

初めて手でカレーを食べてみましたが、つかむことすら難しく、とても食べづらかったです。それなのに、手で食べることが世界ではスプーン、フォークより多いとは驚きです。スプーンや箸の方が使いやすいのに、どうして手で食べるのかとても不思議に思いました。でも、それもその国の文化、伝統だし、代々受け継がれてきたものだと考えると、それがそれぞれの国の良さでもあると思います。

2年　金沢　真衣（福地中学校出身）

手食に挑戦しました。食べるのにも「左手は駄目」「3本指」とルールがあって、難しそうだと思いましたが、意外にも食べることができました。改めて考えてみたら、手で食べる人たちの方が常に手を清潔に保っているのではないかと思いました。日本人が、手も箸もスプーンなど使い分けているのが珍しいことかもしれないと、今回の授業を振り返ってみて考えました。世界中にはいろいろな文化があって、その中にはもちろん決まりごとやルールもある、そのことを知ることができて良かったです。

人間学Ⅱ

羽仁もと子にせまる

1月21日(木)、人間学「現代を生きるⅡ」の校外授業を行った。場所は、羽仁もと子記念館八戸友の家。新型コロナウイルスの影響で休館となっていたが、友の会の方々のご厚意で特別に開館していただいた。これまで4回の授業の中で『人間「羽仁もと子」』について紙芝居やプリントを基にもと子の生涯、生き方を勉強してきた。『人間「羽仁もと子」』の最後の授業となったこの日は、校外での授業ということで、記念館訪問を楽しみにしていた生徒たち。到着後は、もと子が創刊した歴代の「婦人之友」や新聞記事を手に取ったり、当時の貴重な映像に見入っていた。また、分からない言葉や疑問に思ったことは、その都度友の会の方々に聞き、もと子の思想を違う角度から学ぶことができた。約1時間弱の見学だったが、教科書だけではわからないもと子について知ることができた生徒たちは、「もっと見たい」「もと子の与えた影響は凄い」などと述べ、充実した時間を過ごしたようだ。

《生徒感想》

3年　佐々木美空（根城中学校出身）

記念館の中に『羽仁もと子著作集人間篇』という本があり、「人間科学―巻頭の言葉」としてこんな言葉が書かれていました。「人間はまず人間を知らなくてはなりません。人間を知らないで人間を生きようとするのは無理なことです」とありました。この言葉は、深く、私の心に強く響き、本を読み進めました。もと子さんが幼いころから目指していた夢や希望を現地に行き叶えるだけではなく、どんなことが起きても女性や子どもの将来や今のために、必死で働いてきたことを忘れてはならないと感じました。生涯最期まで貫いてきた思いが、今私たちがいる時代まで受け継がれていることは凄いと思うし、私ももと子さんのように周りを見て行動できる強い人間になりたいです。

3年　橋本　美優（大館中学校出身）

記念館に置かれていた『婦人之友』の原稿には、赤と黒の鉛筆で漢字や文章などの直しなどたくさん書き込まれていました。やはり本物の資料は、写真で見るのとは違い迫力があると思いました。昔、出されていた本物の『婦人之友』は薄かったですが、その分1ページ1ページに様々なことが書かれていました。空襲時の止血方法、服の縫い方、料理の作り方などたくさんのことが載っていて、勉強になると思いました。また、本棚の中には料理の本や育児本などもあり、これを見ながら特集を作っていたのかと思うと、もと子さんは凄い人だと思います。努力と強い志を持って、自分の夢をつかみ取ったもと子さんを見習っていきたいと思います。

3年　久慈　頼我（百石中学校出身）

羽仁もと子がどのような人生を歩んできたのかを記念館で知ることができました。もと子は女性の立場で、女性の教育の在り方、女性に対する社会の在り方などに疑問を持ち、自ら行動を起こしました。そしてそれらに変革をもたらしていきました。凄まじい行動力の持ち主であったと共に素晴らしい思想を持っていた人だと思いました。

3年　八木田健真（北稜中学校出身）

まず目に入ったのは自筆の文集でした。もと子本人が書いていた物がそのまま残っていて歴史を感じました。学校でもと子について勉強した内容を資料を見ながら確認することができました。他にも、もと子が大勢の前で話している映像を見ました。改めてもと子の功績は凄いというのを実感できたし、記念館を見学することができて良かったと思いました。

3年　佐々木涼介（第一中学校出身）

記念館にある資料は、どれもとても興味深い内容でした。資料の中には、ズボンの作り方や料理の紹介などがあり、当時の主婦たちは、この本を見て生きていたのだと思うと主婦の生活を支えていた『婦人之友』は凄いものだと思いました。資料の中にある文集の一節に、心にくる話を見つけました。当時見ていた人も同じ想いを持ったのかなと思うと不思議な気持ちになりました。最後、実際に『婦人之友』で使われていた花のイラストを見ました。どれも綺麗でそうしたイラストなども世の人々を魅了していたのかもしれないと感じました。